キリストの仲間 **ローマ 16:1-16**

これまで 4 回にわたって「遠くて近い信仰者」というテーマで人物の学びをしてきました。ここで少し間を取り、しばらくしてから「遠くて近い信仰者パート２」の学びをしたいと考えています。今日は先週まで聖書通読の箇所であったローマ人への手紙を取り上げます。使徒パウロは、数多くの手紙を書きましたが、そのうちの 13 通が聖書に遺りました。パウロの手紙は教会から教会へと回覧され、説教として朗読されました。ローマ人への手紙は、パウロが伝道旅行の最中に書いたもので、神の救いの計画が体系的に書かれています。ローマ人への手紙は、まるで論文のようで、すこしも手紙らしくないのですが、最後の章、つまり今日の箇所に来ると、「よろしく」「よろしく」「よろしく」と、挨拶が続き、ようやく手紙らしくなります。

今日の箇所にはパウロの仲間への挨拶がたくさん出てきますが奉仕についても大切なメッセージが含まれています。そのことを学びたいと思います。

まず、第一に学びたいのは、奉仕はチームワークだということです。

使徒パウロは、他のどの使徒よりも多くの人々に福音を伝えた人で、初代教会最大の伝道者と言ってよいほどです。また、パウロは、神の救いの計画を体系的に論じ、その後の神学の基礎を築いた人でもありました。彼があまりにもぬきんでていた人物なので、私たちは、しばしば、彼がひとりで何もかもしたかのように思いがちですが、決してそうではありません。ひとりでできることには限界があります。それが大きな働きであればあるほど、より多くの人々の協力が必要になります。ローマ人への手紙には 30 名以上の人々の名前があげられていますが、パウロは、これらの人々を「同労者」、つまり、「いっしょに働いた人」、「チームメンバー」と呼んでいます。他にも、数知れないほどの人々がパウロを支え、パウロと共に働いたので、パウロは、あのように大きな働きをすることができたのです。

パウロは最初にケンクレヤ教会の女性執事、フィベの名をあげています。パウロはフィベについて「この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた」（2 節）と言っています。使徒たちを助け、人々を助けるのが執事の役割ですが、フィベは、人々を助け、使徒パウロを助けることによって執事の務めを果たした人でした。時々、人々を助けているように見えて、そのことで自分の存在感を得ようとする人がいます。また人をコントロールするようなこともあります。相手の立場からものを見てその人を助けることは簡単にできることではありません。自分をいつも助け手の立場におくことも、へりくだった思いがなければできることではありません。しかし、フィベはその務めをみごとに果たした人でした。フィベは人々を助け、パウロを助けた、ほんとうの援助者でした。助けるのが上手な人だったのです。パウロにはフィベ以外にもこうした助け手が多く与えられていたのです。

次に名前が挙がっているのはプリスカとアクラ夫妻です。彼らはパウロの「同労者」（3 節）と呼ばれています。アクラとその妻プリスカは、ローマでユダヤ人追放令が出たため、コリントに逃れてきていました。そこでパウロとアクラ、プリスカ夫妻は出会ったのです。パウロは天幕作りを職業としていたアクラ、プリスカ夫妻といっしょに、しばらくの間ですが、天幕作りをしたことがありました。アクラとプリスカは神の働きを共にした「同労者」であるとともに、天幕作りという職業においても、同労者だったのです。一年半の後、アクラとプリスカはパウロと一緒にエペソまで行き、パウロがエペソからカイザリヤに向かって船出するのを見送った後もエペソに留まり、そこで伝道しました。その後、アポロという伝道者がエペソに来たのですが、アポロはバプテスマのヨハネが授けたバプテスマしか知りませんでした。バプテスマのヨハネが受けたバプテスマは罪の悔い改めのバプテスマですが、主イエスのバプテスマは罪の赦しのバプテスマです。アクラ、プリスカ夫妻は、アポロを自分の家に迎えて世話をしたばかりでなく、バプテスマに関してさらに正確な教えをアポロに伝えています。アクラ、プリスカ夫妻は、伝道者を

経済的に支援しただけでなく、教えの面において、霊的なことがらにおいても、伝道者を助けることができるほどの人々でした。エペソの教会は小アジアの町々への伝道の拠点になるのですが、その基礎を築いたのが、アクラ、プリスカ夫妻だったのです。

9 節では「ウルバノ」が、21 節では「テモテ」が「同労者」と呼ばれています。パウロは、福音に反対する人たちに対してたったひとりでも立ち向かっていった勇敢な人でしたが、他の人と一緒に働くことができないで、ひとりでものごとをするいわゆる「一匹狼」のような人ではありませんでした。パウロは強いリーダシップを持っていましたが、他の人々と協調して働くことのできる人でした。第一回目の伝道旅行はアンデレと一緒に、第二回目にはシラスといっしょに出かけています。第二回目の伝道旅行には、テモテや医者ルカ、そして、アクラ、プリスカ夫妻たちがその仲間に加わりました。パウロの伝道旅行を経済的に支えた人、パウロの健康管理をし、伝道の記録を書き留めた人、パウロに代わって人々を教え、教会を指導し、説教した人、町の有力者との交渉にあたった人、何よりもパウロのために日夜祈り続けた人、また、パウロを励まし、支えた多くの人々がパウロのまわりにはいたのです。パウロはこうした人々とともに働きました。その働きはこうした人々とのチームワークでした。

ローマ人への手紙の最後で、パウロは、自分を助けてくれた人、自分と一緒に働いてくれた人たちを心に覚えて、ひとりびとりに「よろしく」と挨拶を送りました。同じように、私たちがまごころを込めて神のために奉仕するとき、たとえ、それが小さな奉仕であったとしても、人の目には隠れてはいても、神は、私たちを覚えていてくださるのです。ヨハネの手紙に「ですから、私たちはこのような人々をもてなすべきです。そうすれば、私たちは真理のために彼らの同労者となれるのです。」ヨハネ第三 8 とあります。これは、牧師、伝道者、宣教師をサポートすることによって、その人たちがしているのと同じ働きに加わることができ、その報いを受けることができるということを教えています。先日の河野先生のタイ宣教報告がそうですね。みんなが伝道者、宣教師となって他の国に出かけることができるわけではありません。しかし、そうした人々のために働いている人々を支援するなら、それによって私たちもそうした人々の同労者となって、神に奉仕することができるのです。教会全体が神の働きのためのチームです。誰も、ひとりでは何もできません。あなたの奉仕がみんなを助けます。みんながあなたの奉仕を助けます。そして、私たちは共に、神のために働くのです。神への奉仕をチームワークによって果たしていきましょう。

第二に、奉仕は分かち合いです。

ともに奉仕する人たちは、ビジョンを分かちあいます。労苦を分かちあいます。そして、喜びを分かちあいます。ビジョンを分かち合えるというのはいいですね。こんなふうに伝道したい、こんな教会を建てあげたい、というビジョンを共有しているなら、みんなが生き生きと奉仕することができ、その奉仕は実を結びます。奉仕はチームワークですが、そのチームワークをまとめあげているのが、リーダのビジョンです。どんなグループでも、そのリーダのビジョンを共有することなしには、チームワークは成り立ちません。パウロはパウロと共に働いてくれる同労者、伝道チーム、奉仕チームが必要でしたが、彼の同労者、伝道チーム、奉仕チームは、パウロのビジョン、リーダシップが必要だったのです。パウロによって、福音とは何なのかということを教えられ、どのようにしてそれを伝えていくのかという方向づけが与えられたので、チームワークが実を結んだのです。使徒パウロはテモテに「しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。」テモテ第二 3:10-11 と言っています。テモテをはじめとしてパウロの伝道チームはパウロのビジョンを理解し、受け止め、それを実践しました。ビジョンを分かち合うことができるチームを持ったリーダは幸いです。リーダのビジョンを理解し、受け止め、実践するチームも幸いです。

ビジョンの次に必要な分かち合いは、重荷と苦しみの分かちあいです。私たちの教会は新会堂が 9 年前に建てられました。それ以前にすでに土地の購入があったので動き出したわけです。そのために昔、そして今もおられる方々が多くの捧げものをしてくださいました。ただ新会堂建設のためには銀行からの融資が必要でしたから借り入れをして昨年までずっと返済をしてきました。そして昨年、コロナ禍で社会情勢がどのように変化することが分からないことから一括返済ということで教会債を募り銀行に一括返済をしました。これもまた一時献金を含めて返済に十分な金額が集まりました。もちろん教会債ですから返済されるもので毎月これも積み立てられています。献金封筒の項目の会堂献金とはそのことですのでよろしくお願いいたします。アメリカでは教会が会堂建設を始めると、メンバーが減っていくと言われています。そして建つとまた戻ってくるそうです。人にはいろんな事情がありますから一概には言えませんがそういった人は、教会の建物にささげるはずのお金を節約したかもしれませんが、実は、信仰の喜びを失っているのではないかと思うのです。何故ならキリストを信じる信仰の喜びは、キリストのための苦しみを共にすることなしには決して得られないからです。お金に限りません。信仰の喜びはキリストのために共に苦しむことから与えられるのです。いつの日か私は信仰者として人生を振り返った時にいろんな人のことを思い返すと思います。その時に発する言葉として「あなた教会におられましたね」ではなく「あなた、一緒にキリストに仕え、奉仕した仲間ですよね」そんな風に言えたら良いなと思っています。

アクラとプリスカ夫妻は、パウロといっしょに苦しみを分かち合った人たちでした。パウロは、この夫妻について「この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。」（4 節）とまで言っています。「いのちの危険を冒した」ということが、具体的にどんなことだったかわかりませんが、おそらく、パウロの命が奪われそうになったのでしょう。そのとき、アクラ、プリスカ夫妻は、命がけでパウロを守ったのでしょう。彼らは、パウロを守るためには、自分たちが身代わりになって死んでもよいというほど、真剣に神に奉仕し、パウロに仕えたのです。このようなことは、奉仕を、人にほめられようとして、ましてや、自分のやりがいのためにする活動だと考えている人には決して理解できないでしょう。パウロの同労者たちは、キリストのために、福音のために、そしてパウロのために、命がけで働いたのです。パウロはテモテに、何度も「私と苦しみをともにしてください。」テモテ第二 2:3 と言っています。苦しみを分かち合うことによって、ほんとうの意味で同労者となることができるのです。

教会の奉仕は、たんに組織が整ってものごとが動いていれば良いのではなく、その奉仕がどんな動機で、何のためになされるのかが大切にされなければなりません。奉仕する者たちが、互いにその「役割」だけを求めあうのでなく、お互いの間に、キリストの愛による、苦しみの分かちあいが無ければならないのです。聖書は「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」ガラテヤ 6:2 と教えています。

パウロはローマ 16:13 で「主にあって選ばれた人ルポスによろしく。また彼と私の母によろしく。」と言っています。これはルポスとパウロが同じ母親から生まれた兄弟ということではなく、ルポスの母親がまるで、パウロを自分の息子のようにして、世話し、祈り、支えたということを言っているのでしょう。ルポスの母親は、パウロにとっての信仰の母だったのです。たとい、高齢になって身体を使っての奉仕ができなくても、ルポスの母親のようにして、使徒を励まし、使徒の「同労者」になることもできるのです。神を父とし、キリストを主とする信仰のまじわりの中に、苦しみを共に分かち合えるまじわりを育てていきましょう。そして、私たちの人生の総決算の日に、「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんのものを任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」（マタイ 25:21）との声を聞くことができる主のしもべとさせていただきましょう。